

# 保育所等訪問支援から見えてきたこと

作業療法士 大城由美子

## 保育園・幼稚園での困り感

- 集団の活動に参加できない。
- 落ち着きがなく動き回り部屋からの飛び出しがある。
- 好きなこと（恐竜や車など）には夢中になるが、それ以外は全く興味を示さない。
- 思い通りにならないと暴れる、かみつく。
- 外に出たがらず、いつも室内で遊んでいる。
- 力加減が取れず友達を押してしまうトラブルになる。
- ひどい偏食。
- 生活習慣がなかなか定着しない。
- お箸やスプーンが上手に使えない。
- 表情が乏しい、笑わない。
- 抱っこがしっくりこない、おんぶしづらい。
- 寝返りの時、反り返る。
- しっかり足指を蹴った這い這いをしない。
- 今いけないことをして叱ったのに同じことを繰り返したり、ヘラヘラして笑っているよくあちこちぶつかる、よく転ぶ。

## 小学校低学年の困り感

- 集団の活動に参加できない。
- 落ち着きがなく動き回り部屋からの飛び出しがある。
- 好きなことには夢中になるが、それ以外は全く興味を示さない。
- 思い通りにならないと大きな声を出したり、教室から飛び出す。
- 姿勢が悪い
- 漢字が書けない。
- 計算が出来ない。
- 体育など運動が苦手。
- 生活リズムが整わず遅刻が多い。
- 忘れ物が多い。
- 物の整理整頓が出来ない。
- 宿題をしないでゲームをやり続ける。

## 小学校高学年での困り感

- 漢字が覚えられない、書けない。
- 板書を書き写すことに時間がかかる。または書き写すことが出来ない。
- 計算が苦手で九九や繰り上がり繰り下がり計算が苦手
- 図形が苦手。
- 作文が書けない。
- 登校を渋る。
- 発表会や運動会の行事等に参加できない。
- 指示に従わなく反抗的な態度をとる。
- 気持ちや考えていることを伝える事が出来ない。
- 運動が苦手
- ゲームをやり続け、やるべきことが後回しになる。

## 中学生の困り感

- 漢字が覚えられない。
- 板書を書き写すことに時間がかかる。または書き写すことが出来ない。
- 計算や図形が苦手
- 作文が書けない。
- 自信がなく登校を渋る。
- 発表会や運動会の行事等に参加できない。
- 反抗的な態度をとる。
- 友だちとの関わりが上手にできない。
- 進路を決めるのにどこを選択したらよいか分からない。
- テスト勉強をしない。
- ずっとゲームをしている。（家族が寝た後に夜中にやっている）

# 今の学校の様子

- ・コロナ感染拡大防止のためマスク着用、手洗いの徹底
- ・給食は一人席で食べる
- ・グループ活動が減る
- ・遊びが限定され外遊びが減る

## 子の視点で取り組みを

### 県内問題 教育関係者、必要性訴え 行動調査

暴力行為やいじめの認知件数、不登校の児童生徒数が過去最多となった。県教育委員会の担当者は「いじめや暴力行為を隠すのではなく、見つけて対応するのが大切だ」と、積極的な認知の成果を強調する。一方、保護者や教員からは、決まり事が増えた学校で子ども

が喜ばないと感じ、不登校につながるという指摘する声も出ている。教育関係者は、子ども視点の取り組みの必要性を訴える。

【一面に関連】 いじめや暴力行為の数の中には、ふいにぶつかって不快感を与えたり、ものを壊してしまったといった

軽微なものも含まれる。県教委の担当者は「深刻なケースはもちろんあるが、学校の環境が悪くなったかどうかが、そうではない。数だけを見て悪化したという印象が生まれ、現場が萎縮するようであれば不意に」と話す。

一方、不登校が増加する

背景に、学校のスタンダード化を望む教員や保護者は多い。ノート取り方や話を聞く姿勢など、細かな決まりをついている。学校全体を落ち着かせるためのもので、学力向上対策と並行して広まったとみられる。ある小学校教諭は朝のあいさつは念押しのため、立ち止まらなければならぬ。授業中は鉛筆と消しゴムしか出してはいけない決まりがあり、机に筆箱を置いて怒られる。子どもたちは居る学校生活にストレスを感じ

ている」と説明し、見直しを求める。

フリースクールや放課後児童クラブを運営する侍学園スノーラ・今人沖穂校長は、不登校児童の増加について「子どもたちは対人関係に不安を抱えているようだ。不登校ではないが、登校しづらくなる」と指摘。何があげられるか、子どもと一緒に考えることが大事だ」と話した。

琉球大学教職大学院の丹野清彦教授は、いじめや不登校を「大人になると不安、自分の未来の地獄が描けない」といふSOSと受け止めた。社会全体の不安定さ、不透明さが子どもにストレスを与え、いじめや不登校という形で投現されたら分析する。「登校しづらくなるのは不幸になる。不登校の数が増え続けるのは残念だ。今ある策が子どもたちにとって出発したのか、考えすぎかけになる」と話した。

# 今の学校の様子

- 小中学校の支援学級の増加、通級指導教室の利用の子ども増加
- 気になる子、配慮の必要な子ども増加に伴い、支援員の不足
- 支援学級の増加に伴い教室がなく、一つの部屋を板などで2つの教室に分けて利用。

(音に過敏な子どもにとっては落ち着かない)

# 子どもの育ちの現状と背景

- ・ 基本的な生活習慣や態度が身についていない
- ・ 他者とのかかわりが苦手
- ・ 自制心や耐性，規範意識が十分に育っていない
- ・ 運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている。
- ・ 小学校1年生などのクラスにおいて，学習に集中できない
- ・ 教員の話が聞けずに授業が成立しないなど学級がうまく機能しない状況が見られる。
- ・ 子どもたちは，多くの情報に囲まれた環境にいるため，世の中についての知識は増えているものの，その知識は断片的で受け身的なものが多く，学びに対する意欲や関心が低いとの指摘がある。



## 子どもの育ちの変化の社会的背景

- 少子化・核家族化・都市化
- 情報化
- 国際化など我が国経済社会の急激な変化を受けて、人々の価値観や生活様式が多様化している
- 人間関係の希薄化
- 地域社会のコミュニティ意識の衰退
- 過度に経済性や効率性を重視する傾向
- 大人優先の社会風潮などの状況が見られるとの指摘がある。
- 地域社会などにおける子どもの育ちを巡る環境や家庭における親の子育て環境を変化させている

※これらのことが複合的に絡み合って、子どもの育ちに影響を及ぼしている要因になっているものと考えられる。

## 子どもの育ちを巡る環境の変化　－地域社会の教育力の低下－

- 地域社会などにおいて子どもが育つ環境が変化している。  
子どもが成長し自立する上で、実現や成功などのプラス体験はもとより、葛藤や挫折などのマイナス体験も含め、「心の原風景」となる多様な体験を経験することが不可欠である。
- 少子化、核家族化が進行し、子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響しあって活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。
- 都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる
- テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている。
- 人間関係の希薄化等により、地域社会の大人が地域の子どもの育ちに関心を払わず、積極的にかかわろうとしない、または、かかわりたくてもかかわり方を知らないという傾向が見られる。

## 親の子育て環境などの変化　－家庭の教育力の低下－

- 幼児教育が行われる一つの場としての家庭における子育てについても，その環境などが変化。
- 子育てとは，子どもに限りない愛情を注ぎ，その存在に感謝し，日々成長する子どもの姿に感動して，親も親として成長していくという大きな喜びや生きがいをもたらすものである。実際，子どもの成長が感じられたとき，子どもの笑顔を見たときなどに，特に喜びを感じるなど，自分の子育てに満足している親は半数を超えている。
- このような子育ての喜びや生きがいは，家庭や地域社会の人々との交流や支えあいがあってこそ実感できるものである。

- 核家族化の進行や地域における地縁的なつながりの希薄化などを背景に、本来、我が子を自らの手で育てたいと思っているにもかかわらず、子どもにどのようにかかわっていけばよいかわからず悩み、孤立感を募らせ、情緒が不安定になっている親も増えている。→児童相談所における虐待に関する相談処理件数も増加。
- 女性の社会進出が一般的になり、仕事と子育ての両立のための支援が進み、子育ての他にも、仕事やその他の活動を通じた自己実現の道が選択できる社会環境にある中で、子育てに専念することを選択したものの、そのような生き方で良いのか不安を覚え、子育ては「自分の人生にとってハンディキャップではないか」と感じてしまう親がいるとの指摘もある。
- 物質的に豊かで快適な社会環境の中で育ち、合理主義や競争主義などの価値観の中で育った者が多い今の親世代にとって、必ずしも効率的でも、楽でもなく、自らが努力してもなかなか思うようにはならないことが多い子育ては、困難な体験であり、その喜びや生きがいを感じる前に、ストレスばかりを感じてしまいがちであるとの指摘もある。
- 経済状況や企業経営を取り巻く環境が依然として厳しい中、労働時間の増加や過重な労働などの問題が生ずる傾向にあり、親が子どもと一緒に食事を取るなどの子どもと過ごす時間が十分ではなくなり、これも親の子育て環境に影響を与えている要因であるとの指摘もある。

- 子育て環境を改善し，家庭や子育てに夢を持てる社会を実現するため，現在，子育て支援の取組が行われている。
- その取組の結果として，親や企業の際限のない保育ニーズをも受け入れ，単なる親の育児の肩代わりになってしまうことがあると懸念する声もある。この場合，特に低年齢児にあっては，人を愛し，人を信じる心など，人との関係性の根幹を形成する上で必要となる信頼できる大人との1対1による絶対的な依存関係を確保することが難しくなり，子どもの健やかな成長にとって何らかの影響があるのではないかと懸念される。
- 「父母その他の保護者が子育てについて第一義的責任を有する」という少子化対策における基本理念を踏まえ，親の育児を単に肩代わりするのではなく，親の子育てに対する不安やストレスを解消し，その喜びや生きがいを取り戻して，子どものより良い育ちを実現する方向となるような子育て支援を進めていくことが必要とされている。
- 親が，子どもを育て，その喜びや生きがいを感じながらも，仕事やボランティア活動等，様々な形で社会とのかかわりを持つことで，子育ての他にも様々な活動を通じて自己実現を果たせる環境を整備することも求められている。

# マズローの欲求の階層

## 7 自己実現欲求

自己達成の欲求、生きがいの追求

## 6 審美的欲求

精神的ゆとりが欲しい、向上心

## 5 認知的欲求

知的関心、学習意欲

## 4 セルフエスティーム欲求

認められたい、自分を分かって欲しい  
自分を大切にしようという欲求

## 3 所属・愛情欲求

大切にされたい、自分の居場所が欲しい  
人とかわりたいたいという欲求

## 2 安全欲求

恐怖、危険、苦痛からの回避

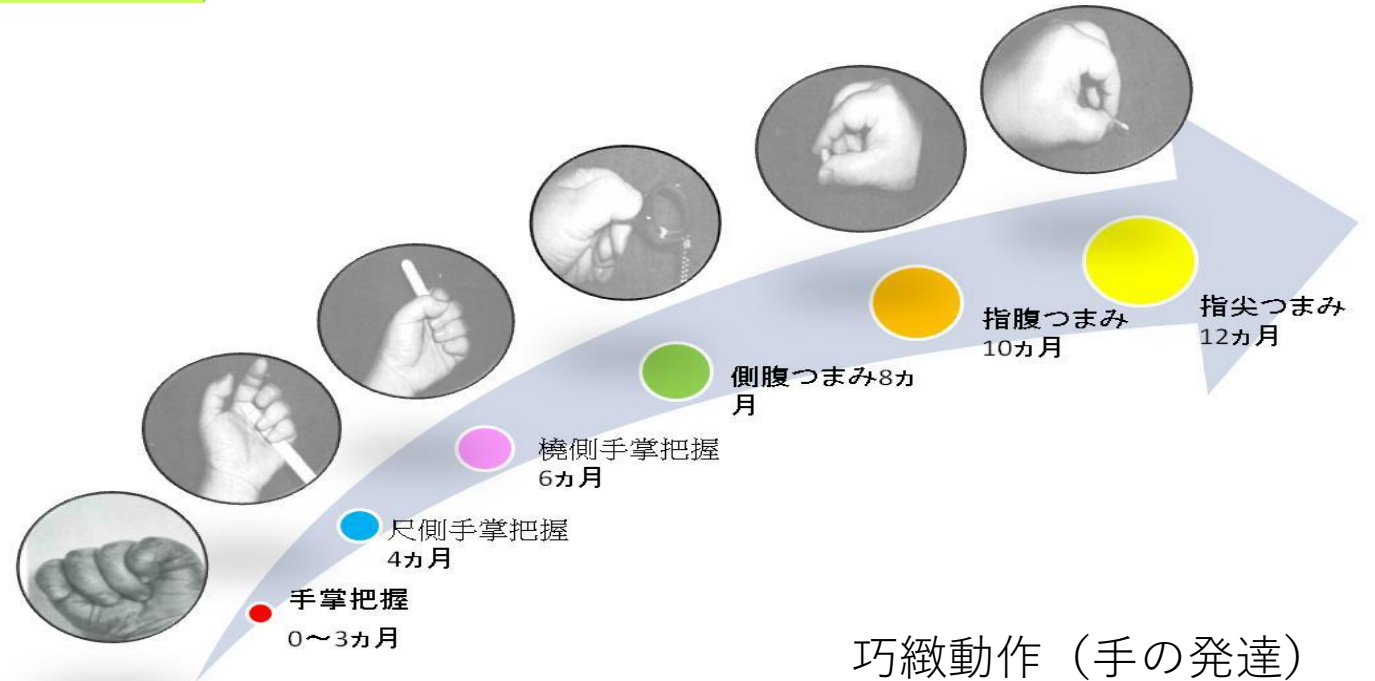
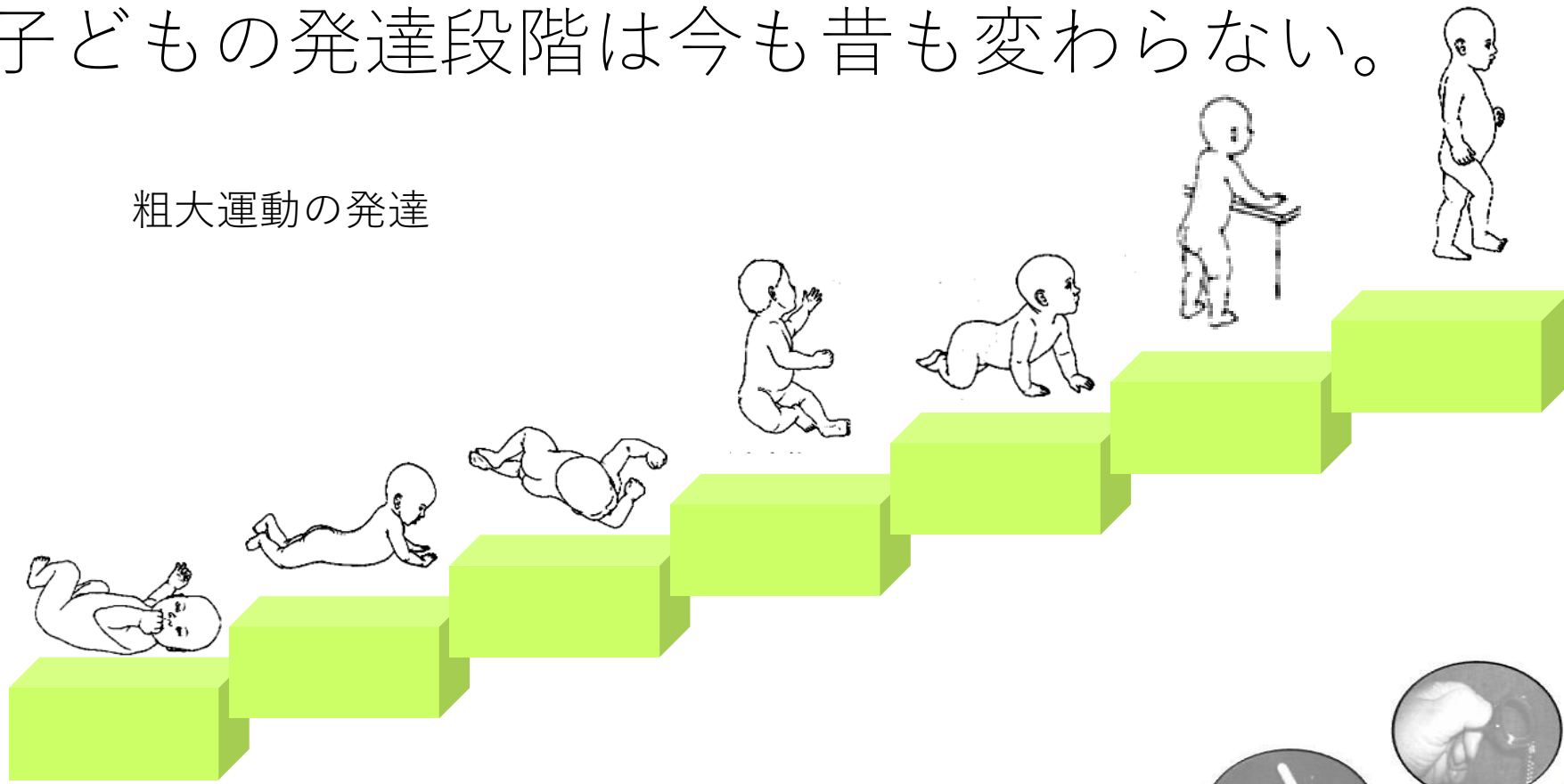
## 1 生理的・身体的欲求

食事、睡眠など生命維持のための欲求

心の安定  
人間にとって大切な欲求  
を満たすことが大切

# 子どもの発達段階は今も昔も変わらない。

## 粗大運動の発達



## 巧緻動作（手の発達）

# 方向性

## 「頭部から下部への傾向」

頭部から体幹下部にかけて眼球運動、上肢の運動、下肢の運動へと運動機能が順序を追って発現すること

## 「中枢から末梢への傾向」

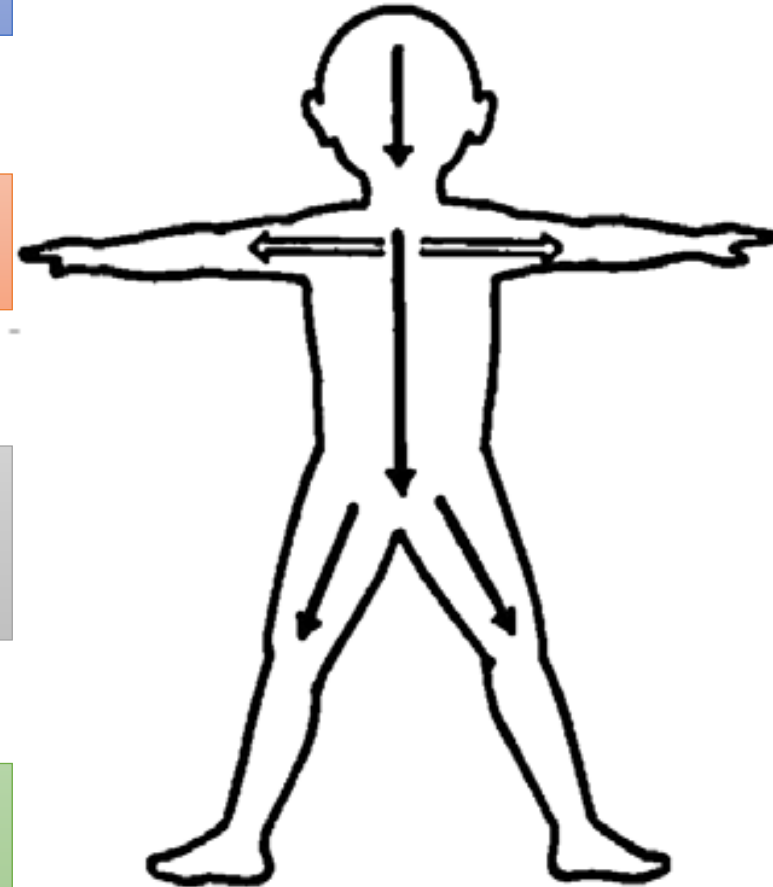
身体の中心部が末梢部より先に成熟し、機能を発揮すること

## 「全体から部分への傾向」

指や手でおもちゃを扱う場合、肩、肘など、全体あるいは全体に近い体の操作から現れてくる様子が見られること

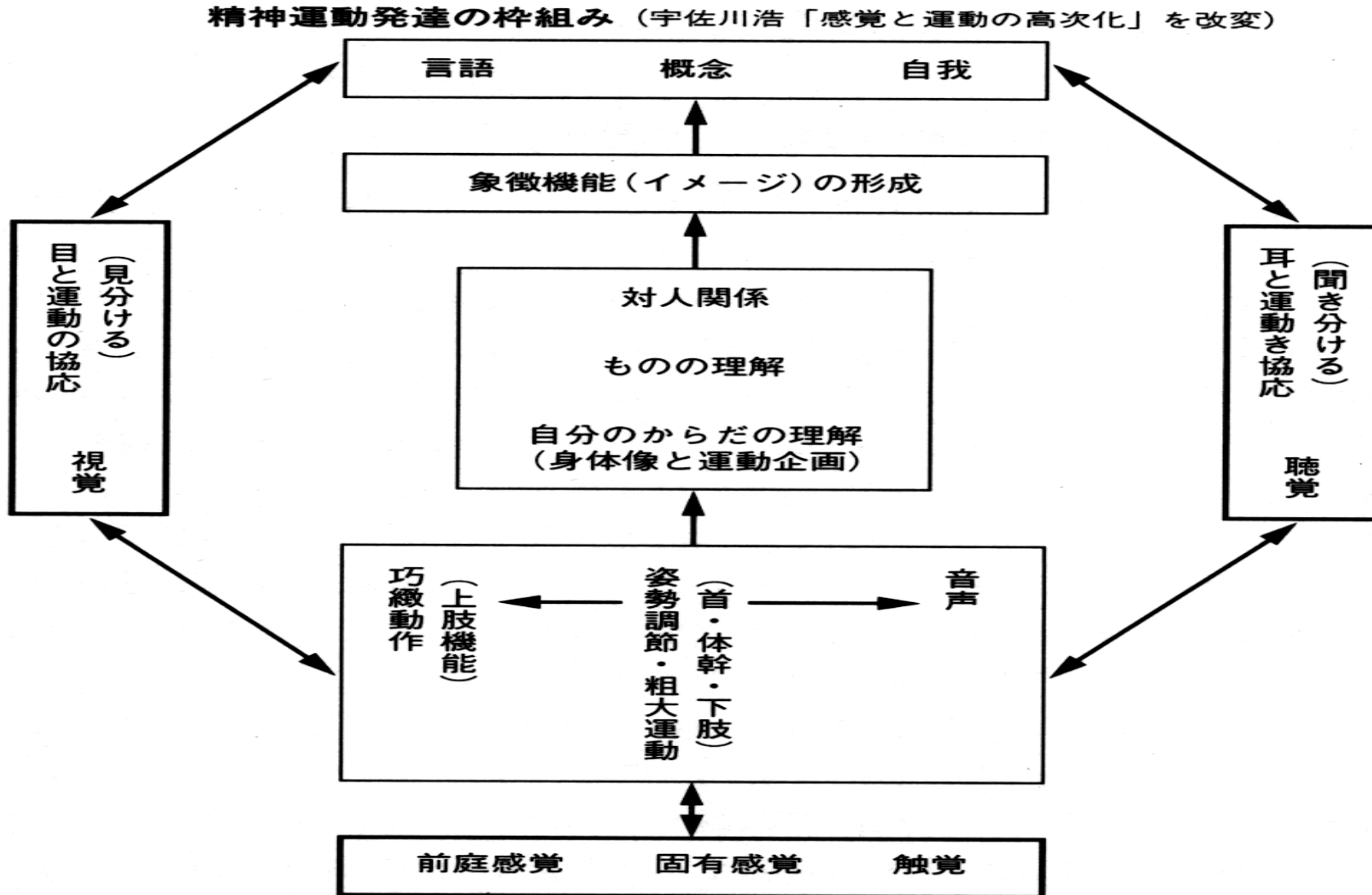
## 「両側から片側への傾向」

両方の手を使い、物を食べたり、紙をちぎったりする両側活動を行うことで、優先される側や利き手・利き足の確立へと発達していく事

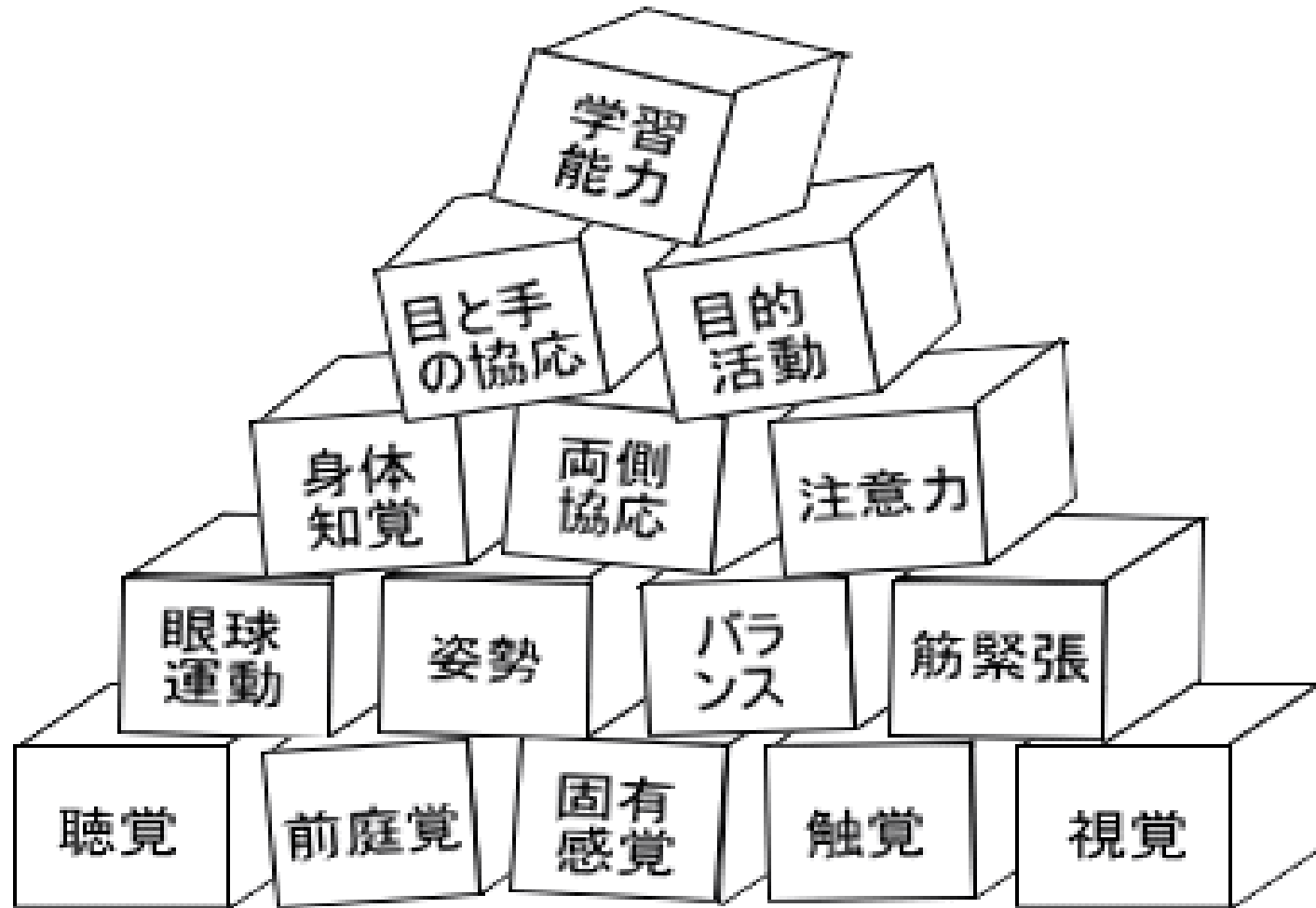




# 環境理解と運動発達過程



# 感覚統合のピラミット



# 身体図式

## 1 身体の地図の把握

## 2 身体の機能の把握

図) 身体図式の発達とは

### 身体図式が **曖昧**

- 身体の輪郭線が分かりにくい
- 手足を動かすイメージが分かりにくい



触覚・固有受容覚、前庭覚  
の統合により発達する

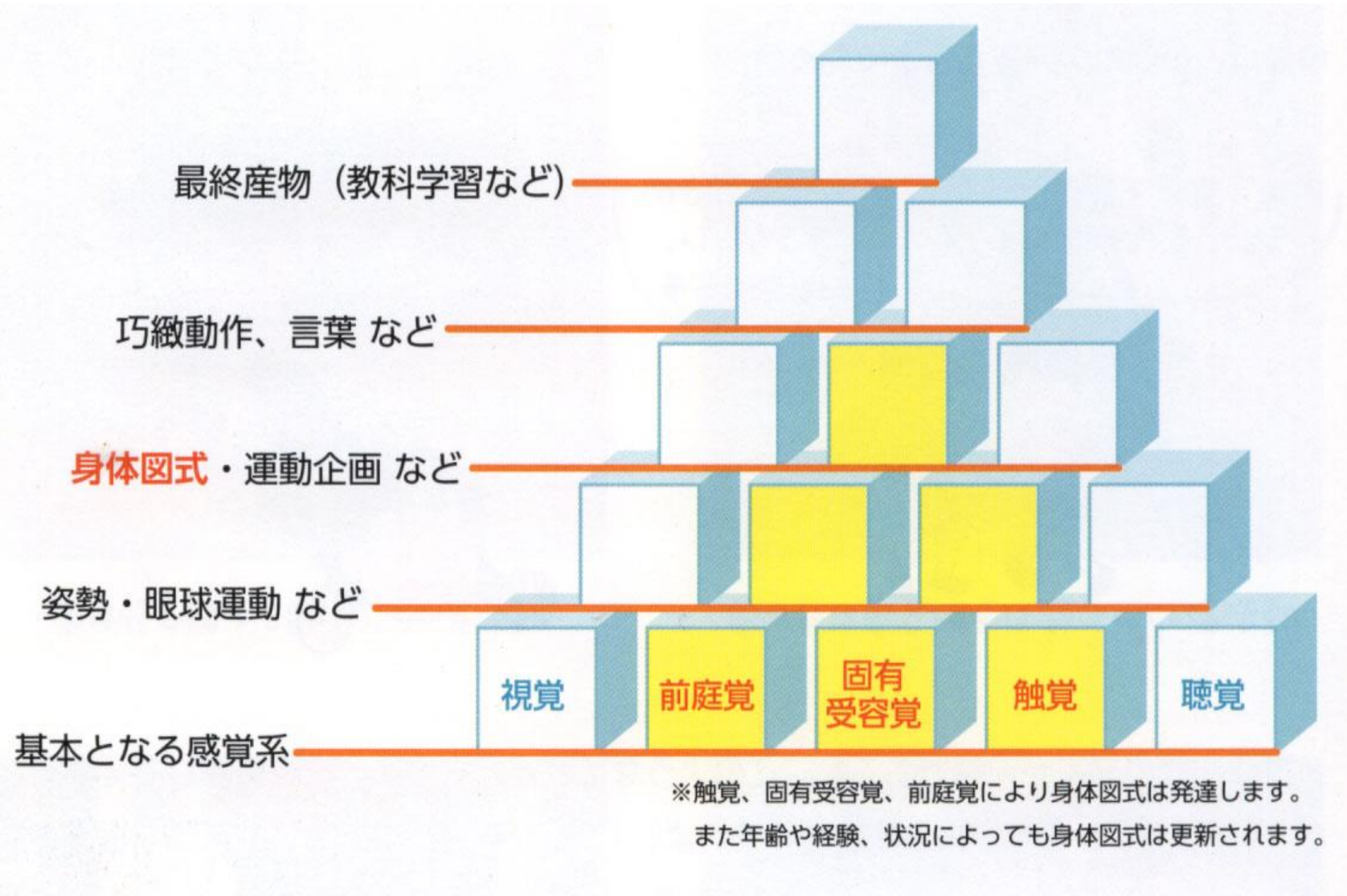


### 身体図式が **明確**

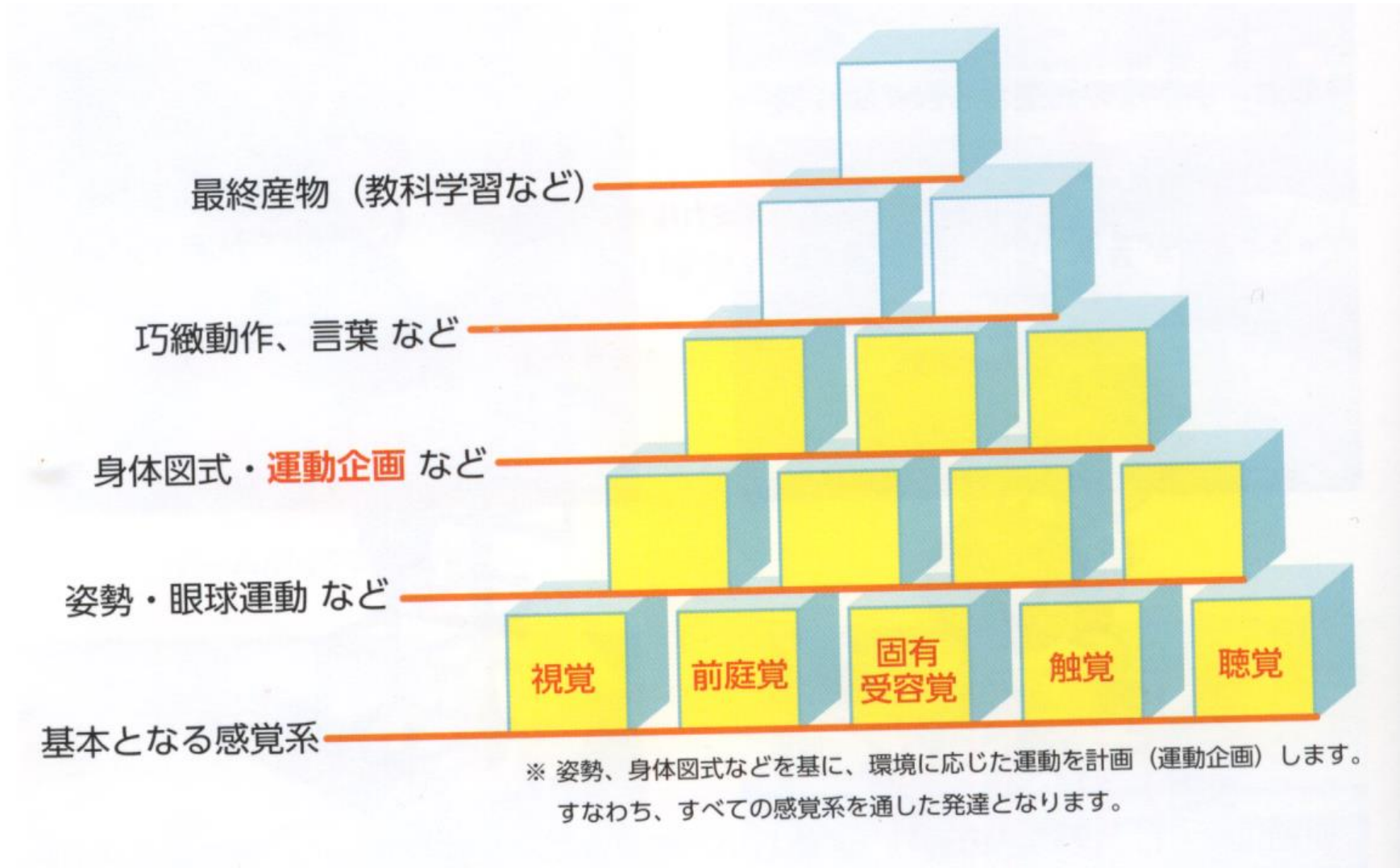
- 身体の輪郭線、動かし方が分かる
- 思うように身体を操作できる



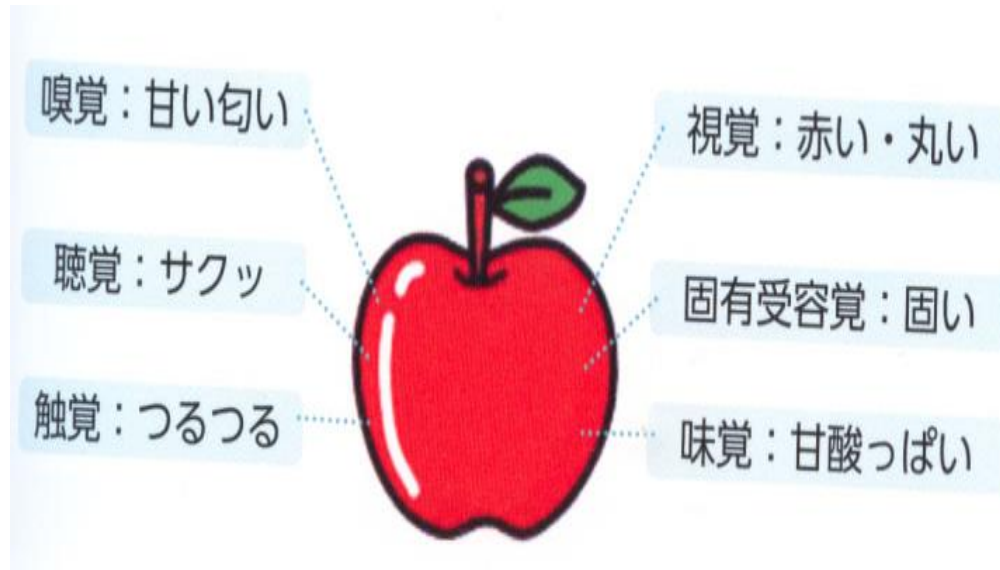
# 身体図式



# 運動企画

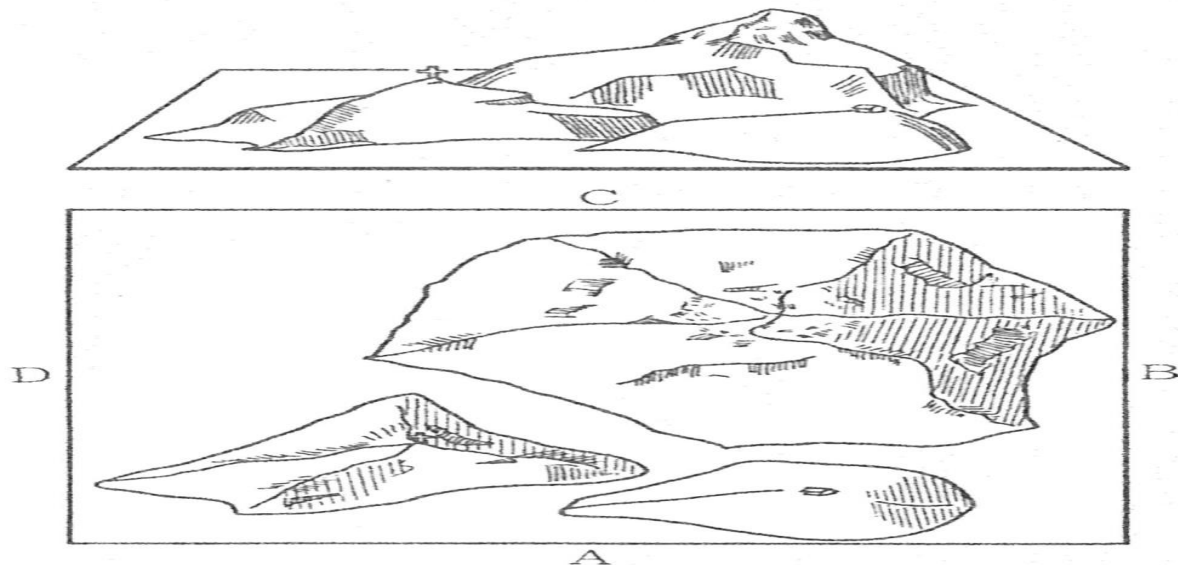


# 事柄が分かる事と感覚のつながり



リンゴと聞いてどんなことを思い浮かべますか

「事柄がわかる」ためにはこれまで何回も見たり、聞いたり、食べたりという体験の中でいろんな感覚の情報を統合することが大切。

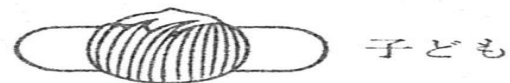
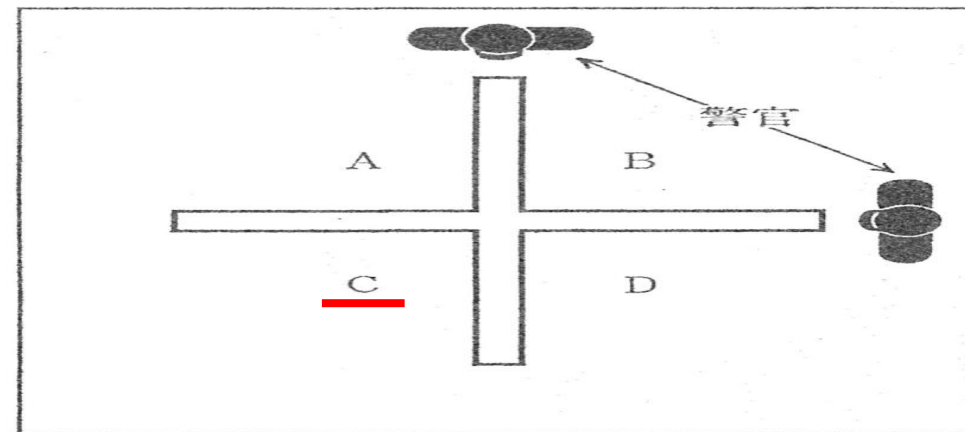


図：Piagetの三山問題

三山問題とは、三つの山の模型を幼児に見せ、人形を子どものいる位置（視点）とは別の位置（視点）に置く。

そして、人形がその位置から山の景色を写真に撮った場合、どういう写真になるのかを子どもに尋ね、様々な地点から取った写真の中から人形の位置から見た写真を選ばせる（あるいは、特定の写真を見せ、その写真はどの地点から撮影したものかを尋ね、その位置に人形を置かせる）という課題である。

（「三山問題」 - Piaget,J.の中期1930～1950年）



図：警官人形を用いた実験

（ゲーム化した「視点の移動」実験）  
4歳足らずの子どもに人形を1個与え、その人形を二人の警察から、見られないように隠すという課題である。

（かくれんぼ遊び的）

（「警察と人形の実験」）- Hughes,M:1978



心の理論：「サリーとアンの実験」-Wimmer,HPerner,H & Perner,J.1983)

# 心の理論 (Theory of Mind)

人は一般に他人にも心が宿っていると見なすことができ (他人への心の帰属)、**他人にも心のはたらきを理解し (心的状態の理解)**、それに基づいて他人の行動を予測することができる (行動の予測)。

## サリーとアン課題 (バロン・コーエンら 1985)

- サリーとアンが、部屋で一緒に遊んでいる。
- サリーはボールを、かごの中に入れて部屋を出て行く。
- サリーがいない間に、アンがボールを別の箱の中に移す。
- サリーが部屋に戻ってくる。
- 上記の場面を被験者に示し、「サリーはボールを取り出そうと、最初にどこを探すか？」と被験者に質問する。正解は「かごの中」だが、心の理論の発達が遅れている場合は、「箱」と答える。

## スマーティ課題 (バーナーら 1989)

- 前もって被験者から見えない所で、お菓子の箱の中に鉛筆を入れておく。
- お菓子の箱を被験者に見せ、何が入っているか質問する。
- お菓子の箱を開けてみると、中には鉛筆が入っている。
- お菓子の箱を閉じる。
- 被験者に「この箱をAさん (この場にいない人) に見せたら、何が入っていると思うか？」と質問する。正解は「お菓子」だが、心の理論の発達が遅れている場合は、「鉛筆」と答える。

誤信念課題に対して、3~4歳児はそのほとんどが正しく答えられないが、4~7歳にかけて正解率が上昇する



“見通し”とは、

今の現状を見据え、それを踏まえて、

将来であれば、今を通し、それによって先々にどう対処するか、  
という「関係予測や推量」を行うもので、  
後悔や反省があれば、過去の行動の良し悪しを判断するものである。



いわゆる、Piagetの言う“視点の移動”という高い  
レベルの「関係比較の認識」を伴うものである。

\* もちろん近い範囲の時間幅であれば、少なくとも“軽度”知的障がい児・者は可能

ちなみに

「見通し」と「時間概念」→8歳～9歳（小学校2～3年生）

年齢が低い子どもは「今を生きる」ことになるので、「先を見通すこと」を苦手とする。

そのため、物事の真偽や善悪などを見極め、自らの考えを定めることの判断力に弱い。

その結果、自己を統制することに難しさが生じる。

心的構造の  
未分化性と壁の硬さ（融通性の無さ）

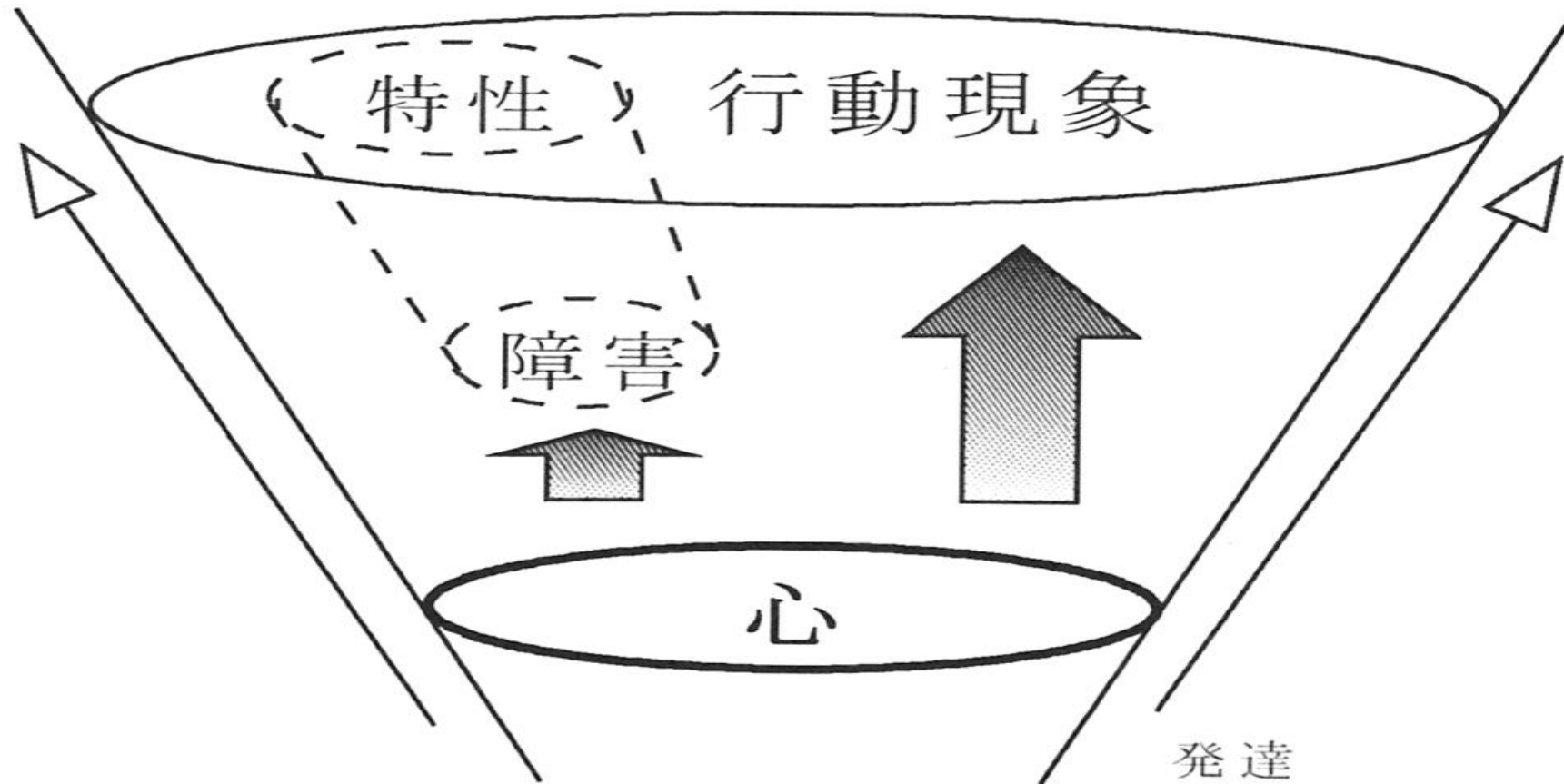


（『知能の本質は見通し』）

（新しい事態に対して

これまでの経験（部分）を

どう全体として再構成し、対応できるか）



人は人によって成り立ち，行動には，それなりの意味・背景がある。

— すべては“こころ”から —

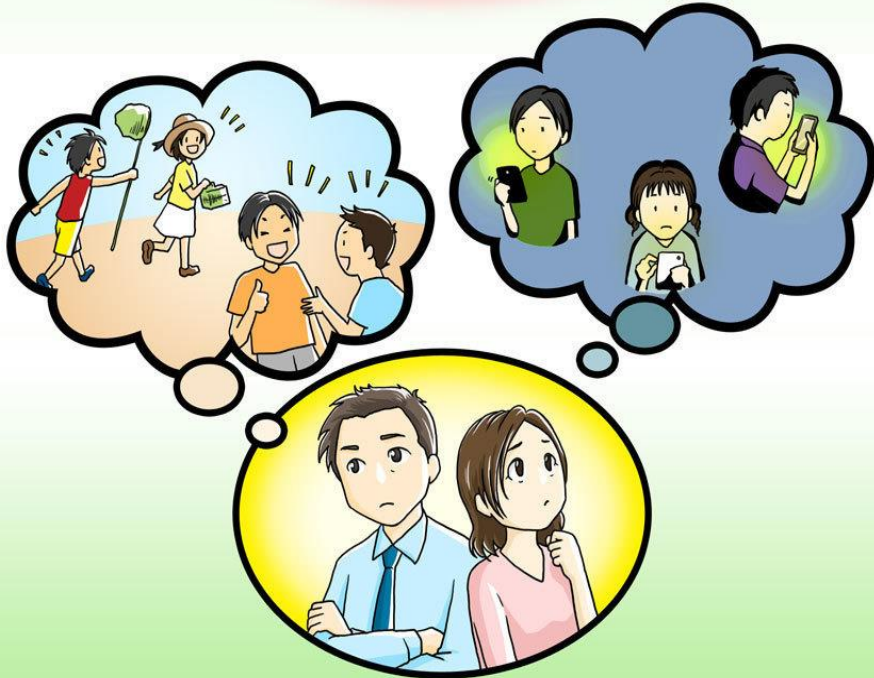
～ 障がいはその子の一部にしか過ぎない ～

与那覇 平成9（1997）年8月4日（月）

## スマホを持たせるのは遅い方が良い

——リアルで遊ぶ、心が通う。  
家庭でできるデジタル障害予防法——

著者：山中憶良 倉石宗範



我が子に育ててほしいイメージはどっち？

東京六法出版・一般社団法人スポーツアカデミー

- 前頭前野（理性や感情の調整）の働きが弱まる。  
軽度だと：集中力や対人能力、意欲の低下  
情緒不安定  
愛着障害（発達障害に類似）  
中程度：引きこもり症候群  
不登校・ニート・就労困難・うつ  
新型うつ・適応障害  
最悪の場合：薬物依存と同じレベルの脳の破壊  
ネット遮断に腹を立て、家族を殺害  
4日間連続してゲームに集中して肺  
梗塞で死亡

**※子どものゲーム依存は脳が未発達なので大人に比べ治療が困難になりやすい。**

# 子どもに関わる私たち…

- 定型発達には順序があるので発達段階の理解
- 適した時期に道具を与える
- いろいろな遊びが経験できる環境を整え、提供する
- 子どもの取り巻く環境、家族の状況も把握して、子どもを理解してくれる人を増やしていく。

時には子どもの想いや気持ちを代弁する

- スマホデジタルの利用も大切だが、慌てず、適した時期に与えていく。
- 子育て支援を地域で支えていく環境を整える。
- 子ども自身のコミュニケーション力やソーシャルスキル、ライフスキルを身につける。

都道府県

- ・ 高度な専門的支援・バックアップ
- ・ (自立支援) 協議会

発達障害者支援センター  
\* 都道府県指定都市

拠点病院  
(子どもの心の診療ネットワーク等)

児童相談所  
\* 都道府県指定都市  
児童相談所

障害保健福祉圏域

- ・ 関係機関等と連携
- ・ 協力による支援機能の強化
- ・ 障害児への入所支援を提供
- ・ (自立支援) 協議会

医療機関  
\* 一定程度高度な対応が可能なところ

\* 人口規模等に応じて各圏域に複数の拠点が必要

障害児入所施設

保健所

児童発達支援センター  
(\*医療型含む)

障害児支援等の利用援助  
その他の支援

市町村域

- ・ 障害児への通所支援を提供
- ・ 地域支援の提供 (保育所等訪問支援、障害児相談支援等)
- ・ (自立支援) 協議会

集団生活への適応等を支援 (アウトリーチ)

保育所等訪問支援

障害児相談支援等

直接支援

保育所等

児童発達支援事業

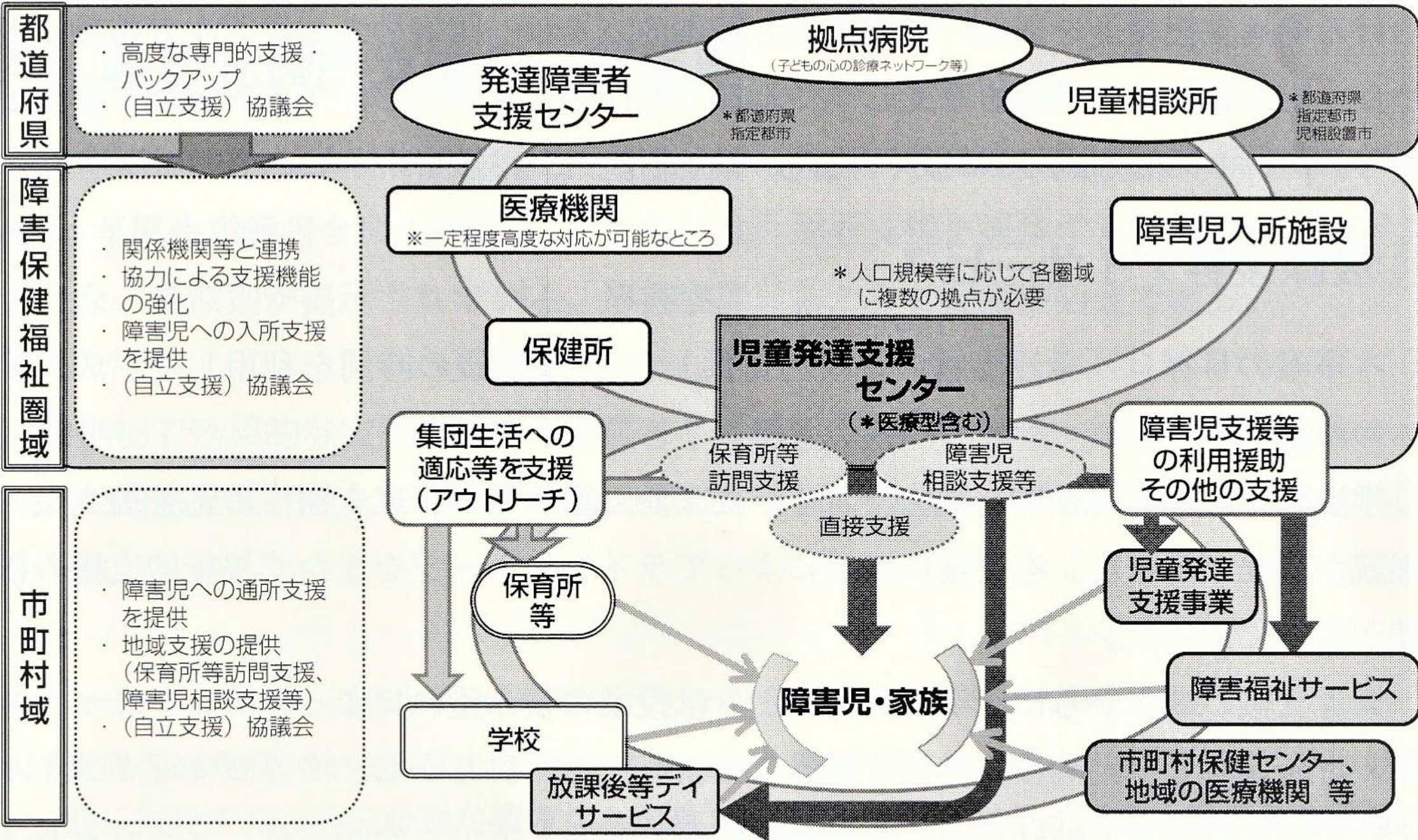
障害児・家族

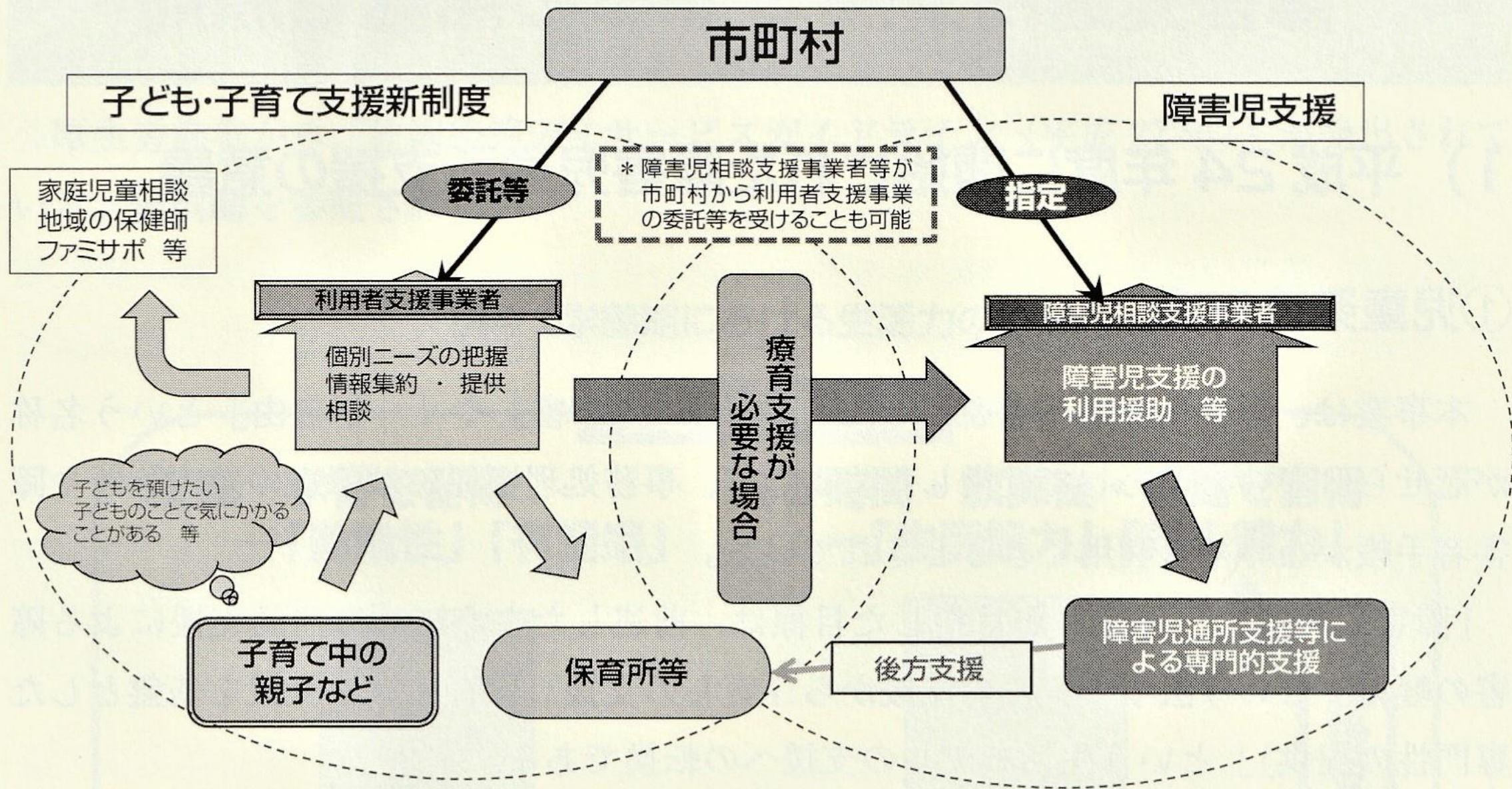
障害福祉サービス

学校

放課後等デイサービス

市町村保健センター、地域の医療機関 等



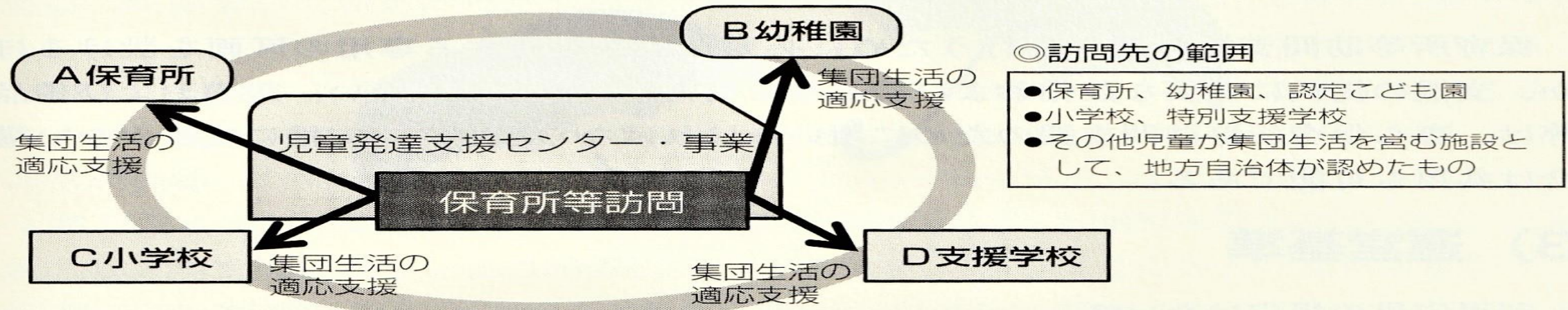
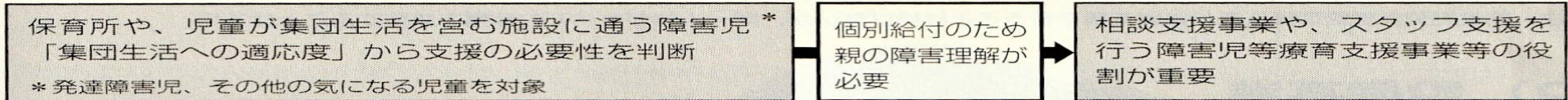




# ○保育所等訪問支援事業の目標は**施設の地域化**

- 地域社会で健やかに育つために施設の専門機能を保育所等に提供し地域における発達支援機能を開拓、育成する。
- 障害のある子どもが施設に通わなくても施設も専門性を享受

## ◎対象児童



## ◎提供するサービス

障害児が集団生活を営む施設を訪問し、当該施設における障害児以外の児童との集団生活への適応のための専門的な支援等

- ① 障害児本人に対する支援（集団生活適応のための訓練等）
- ② 訪問先施設のスタッフに対する支援（支援方法等の指導等）

○児童発達支援事業の目標は医学モデルの支援→生活モデルの支援  
専門的支援による障害の軽減→育ちの支援（保育・育児支援を基盤とした専門性の提供）

○放課後等デイサービスの目標は発達支援の継続的提供、（放課後の時間を利用した）成人期への準備  
アカデミックスキル、ソーシャルスキルやライフスキル

